南日本新聞

2015（平成27）年
9月6日
日曜日

旧暦7月24日
赤口

日	月	火	水	木	金	土
30	31	1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28	29	30	1	2	3

発行所：（郵便番号890-8603）
鹿児島市与次郎1丁目9番33号
南日本新聞社

電話　099-813局
読者センター
　NIE支援　5004
　ひろば・読者応答　5110
フォト（写真）サービス　5003
報道部　5124
　5178
文化部　5136
運動部　5151
写真部　5155
論説委　5101
販売部　5040
広告営業部　5063
事業部　5052
経営企画局　5030
総合受付　5001

足の動脈硬化「ASO」防げ

鹿児島市で23日、公開講座

垣根越え医療連携

早期発見へ啓発開始

高血圧や糖尿病などで動脈硬化が進んで血流障害を起こし、足にしびれや痛みが出る病気、閉塞（へいそく）性動脈硬化症（ASO）。進行すると潰瘍や壊死（えし）を招き、最悪の場合、切断を余儀なくされる。怖い病気だが、あまり知られていないのが実情だ。全国の潜在患者数が200万人以上ともいわれるこの病気が招く、悲惨な事態を少しでも減らそうと、23日に開かれる公開講座を皮切りに鹿児島県でも啓発活動がスタートする。早期発見・治療の大切さを知ってもらおうとの試みだ。（税所陸郎）

活動の提唱者は鹿児島市の鹿児島大学医学部心臓血管・高血圧内科学の大石充教授（52）。鹿児島市の南風病院や今村病院分院の医師のほか、検査技師らが病院の垣根を越えて集まる。「ASOの市民への周知を図るとともに、潜在患者の把握や予防医療戦略も視野に入れている」と大石教授。

今年4月から、診療に携わる内科、外科、整形外科、皮膚科の医師や検査技師が月2回集まり、個々の症例を細やかに検討し、情報交換を進めている。垣根を越えた医療連携で、早期治療や症状悪化を防止するのが目的だ。

2014年度に66人の患者が訪れた南風病院の富村奈津子整形外科部長（46）は「傷が黒いまま残ったり、治療しても傷が治らなかったりする人は血流障害の可能性がある。専門医に受診を」と助言する。

いちき串木野市の女性（84）は、2013年3月、安静時にも右足が痛むようになり、かかりつけ医を受診。その後、血管拡張治療などでいったん回復したものの再び悪化して親指が壊死。今年春に切除せざるをえなくなった。高血圧や糖尿病はあるが、不摂生はなく健康には気をつけていた。「誰でもかかってしまう病気なんですね」と語る。「夜寝られないほど痛くてつらい病気。もっと早く検査しておけばと後悔している」

特報＠鹿児島

ズーム

閉塞性動脈硬化症（ASO）

主に足の動脈に動脈硬化が起こり、血管が詰まったり狭くなったりして血流が悪くなることによる血管病。初期段階は足先の冷え、しびれといった症状だが、進行すると歩行障害や潰瘍や壊死を招く。重症化すると足の切断も必要となる場合もある。高齢、糖尿病、高血圧、喫煙、透析、脂質異常が主な原因とされ、全身の動脈硬化から心筋梗塞など重篤な疾患を発症する危険性もある。

大阪大などで勤務経験のある大石教授は「鹿児島では進行してからASOが確認される例が明らかに多い。初期ならば切除せずにすむ」と早期発見の重要性を強調する。

鹿大心臓血管内科によると、治療は重症度に応じてカテーテル治療やバイパス手術などがあるが、軽症であれば、投薬や食事、運動など生活習慣の改善で進行を抑えられる。

だが、ASO患者は5年以内に心臓などの病気で15～30％が命を落としているという推計値もある。「だからこそ早期の発見・治療が大切」（同科）。

ASOの発見には、下肢動脈の狭窄（きょうさく）・閉塞を調べるABI検査（足関節上腕血圧比）の有効性が挙げられる。上腕と足首の血圧を同時に測定し、比率を測るだけで5分もあれば検査可能だ。同科の池田義之特任講師（45）も「発見には最も効果的」と明言する。

活動は始まったばかり。「病気に対するこういった情報をしっかり発信し続け、さらなる医療連携の強化を図っていきたい」と大石教授は話している。

23日の講座は鹿児島大学医学部鶴陵会館（鹿児島市）で鹿大医学部心臓血管・高血圧内科学が行う。足の痛みと動脈硬化がテーマ。大石教授がASO早期発見の重要性や予防・治療について講演するほか、ABI検査も受けられる。無料。午前10時半、午後1時半からの2回、各先着100人。13日までにファクスで申し込む。鹿大心臓血管内科ファクス＝099（265）8447。

症例を検討し、情報を共有する医療関係者
＝鹿児島市の鹿児島大学病院